

学区内探検隊・・・霊仙三蔵

霊仙三蔵(りょうぜんさんぞう)は息長氏一族として、759年、近江の国、枝折で生まれました。霊仙は幼名を日來弥(ひきね)といい、6歳の頃から15歳頃まで、近くの霊仙寺及び松尾寺で修行し、15歳(774)のころ、奈良興福寺へ入山、法相宗の教義を修行し、併せて漢語を習得しました。霊仙は804年の遣唐使で最澄と空海という、仏教史上もっとも有名となる二人の僧と同船で唐に渡りました。しかし、最澄はわずか8ヶ月、空海は3年で帰国しました。しかし霊仙は、憲宗皇帝の信厚く帰国を許されず、その後23年、在唐し、帰国はついにはありませんでした。霊仙は仏教原典を学ぶため、空海と共に教典研究を行っていました。その後空海は別の研究に移りますが、霊仙は研究を続けました。そうした研究の成果を認められ、その後霊仙は、皇帝に命じられて、般若三蔵とともに未漢訳のまま皇室保管の経典“大乘本生心地観経”の完訳に成功しました。この訳経の功によって般若と共に三蔵の称号を贈られ、唐の国の中枢部分に入ることになりました。そこで、太元帥法(だいげんすいほう)という密教大秘法を修得しました。

太元帥法(大元師法)は、法力により兵乱・賊難を鎮圧する怨敵降伏・護国を実現する秘法です。霊仙三蔵の死後、この太元帥法と法具を霊仙三蔵の遺言で宮中に伝えられ、それ以来鎮護国家の秘法として平将門の乱を鎮めたり、蒙古襲来時も行われ、儀式としては太平洋戦争末期まで続きました。

さて、霊仙三蔵は日本帰国を願いましたが学識を惜しみ、またその知恵が国外に出ることを怖れた皇帝は、帰国をどうしても許しませんでした。しかし、820年に憲宗皇帝が、暗殺されるという事件が起き、反仏教派の力が強くなることで霊仙三蔵は追われる身となりました。渤海に近い五台山で827年に何者かに毒殺されました。享年67才でした。

日本で有名な二人に比べ、無名の霊仙が、実はいかに優秀な人であったかということは憲宗皇帝が、僧の最高称号である「三蔵」を授与したことでわかります。三蔵は僧としての最高位を示す称号であり、位を受けたあとは、霊仙三蔵となりました。霊仙三蔵はただ一人の日本人、三蔵法師です。



霊仙三蔵立像

霊仙三蔵は最澄や空海と並び称せられる平安時代の高僧で、唐の都長安において憲宗皇帝にその卓越した才能を認められ、「大乘本生心地観経」といふ経典の翻訳に従事し、その功績により「三蔵」の称号を贈られました。

米原市には霊仙山が存在することから、この霊仙三蔵は、霊仙山麓の米原市醒ヶ井付近の出身との考え方があり、その顕彰活動が盛んに展開されています。

この像は、米原市出身の彫刻家森大造氏の作品の複製品です。霊仙山の方角を向いて建てられています。

霊仙三蔵顕彰の会

ここから南へ約4kmの所に「霊仙三蔵記念堂」があります。